

神経美学の若きエース

コーディネーター 渡辺 茂

筆者の石津智大さんは、慶應義塾大学博士課程を修了後、2009年から英国ロンドン大学ユニバーシティ校(UCL)で、この本でもたびたび登場する神経美学の泰斗セミール・ゼキ教授と多くの研究を行った。実験心理学と脳機能画像法の技術を活かし、人文学的な問い(美醜の体験、感性、芸術作品の知覚など)の認知神経科学的研究を行う、神経美学という新しい学際領域の若き第一人者である。

私が若かった頃は、人の神経心理はまことに頼りない学問であり、動物実験をしていた者としては大丈夫なのかとずいぶん心配したものである。MRIの発展、特に機能的MRIの発展はヒトの脳研究を一変させた。もちろん、現在でもMRIは信用できないという評価もあり、実際、神経活動の記録としては間接的であることは否めない。それでも、現在では「脳抜き」の実験心理学はあり得ないだろう。

石津さんは、1) 審美的判断の脳内機構、2) 両義図やトリックアートの知覚研究、3) 悲哀や崇高さなどの感情に関する研究などで多くの成果をあげており、この本はそのような経験に基づいて、神経美学をわかりやすく紹介したものである。美学の基盤は哲学かもしれないが、美は人間が実際に感じるものであり、経験科学の対象でもある。実際、グスタフ・フェヒナーの実験美学以来多くの実証的な研究が行われてきた。神経美学はそのような経験科学的研究の流れが神経科学まで及んだものである。

日本学術会議には「行動生物学分科会」という分科会が設置されているが、委員の半分くらいは生物学ではなく、実験心理学の出身者である。これは生物学の主たる分野が分子生物学一辺倒になってしまい、動物の個体としての行動の研究はむしろ心理学者が担うという状況を反映しているのだと思う。行動生物学という分野は、何をしているのかはなんとなく想像がつくだろうが、一般的には知名度が低い。行動生物学分科会では興味尽きないこの分野をなんとか広く知ってもらいたいと思い、中等教育で当該テーマを取り上げるように運動し、又、一般啓蒙活動も行っている。その一貫として、共立出版のスマートセレクションの中で行動生物学の関連書籍をシリーズで出版することを企画した。最初の出版は拙著『美の起源—アートの行動生物学—』であり、この本が2番目ということになる。どちらも美に関するものであるが、拙著は美の生物学的起源を問題として、動物にもヒトのアート類似の行動があるのか、動物はヒトが作ったアートを認知したり、楽しむことができるのか、といった観点から解説したものであるのに対し、この本は美の神経機構に特化した解説になっている。

ずいぶん前に慶應義塾大学で美に関する国際シンポジウムを開催したことがある。このときはゼキ教授をはじめ、美学の教授、実際に制作を行っている教授など、多分野の研究者を集めた意欲的な企画であったが、同時に美を論ずるのは難しいものであることをつくづく実感した。美学の先生が、「美とは制度である」という難しい論を展開される一方で、ゼキさんは「美は脳の中に局在する」と主張する。美大の先生に「つまり美とは何か？」と質問すると「それはわからない、しかし、私はそれが美かどうかはすぐ判断できる」と胸を張られる。聴いている分には面白いが、司会者としてはかなり苦勞した記憶がある。しかし、最近では美の動物研究、神

経科学研究が盛んになり、出版物も次々と出ている。2011年にはパリ第10大学で美についての国際シンポジウムが開催され、その結果は、*Current Perspectives on Sexual Selection: What's left after Darwin* (Springer, 2015) として出版されている。題目が示すように、いわゆるダーウィン美学が大きな論点であった。

本書の第1章は、神経美学が何を扱う学問なのかの紹介である。読者はぜひ、この第1章を飛ばさずに読んで欲しい。第2章は視覚的、聴覚的な美の神経機構の説明である。しかし、美は視覚芸術や音楽に限られたものではなく、数学者は数学的な美を感じるし、道徳的な美というものも考えられる。日常的には、そういうものもあるかもしれない、と思われるにすぎないが、神経機構の共通性と特異性として実証的にとらえたのが第3章で、大変興味深い。第4章は美的判断が美を取り巻く要因にどのように影響されるのかを説いたもので、心理学出身の石津さんの面目躍如たるものがある。いわゆるブランド力などもそのようなものである。第5章は私たちの知覚の制約とエキスパートの見方の比較をしたもので、知覚研究の成果が取り上げられている。美にも進化と発達という問題があり、第6章では原始的な絵画や児童画の不思議が紹介されている。由来、児童画に魅せられた芸術家は少なくない。美に接することは楽しい、快感である。では他の快感を含めてすべては単一の脳内快システムに帰着するのだろうか。第7章ではこの問題が取り上げられ、石津さんは美には生理的・生物学的欲求に基づくものと経験や社会によって形成されたものに区別できるとしている。第8章は一転して、楽しくない美がテーマになる。そんなものがあるだろうか。しかし、私たちは悲劇を楽しみ(?)、崇高さに美を感じる。これは美学の昔からのテーマであるが、石津さんはこの問題に神経美学から取り組む。第9章ではさらに進んで、醜を扱う。現代アートを観

ると、いわれなければ芸術作品とは思えないものもあるが、明らかに嫌悪感を催すような醜いものもある。なぜ、醜もまたヒトは求めるのか。

これまでの章では美を観る、感じる、ということの神経機構の説明であったが、第10章は美の創造がテーマであり、ジャズ・ミュージシャンの脳活動が取り上げられる。この方面の研究は多くはないが、今後の発展が期待できる分野であり、興味尽きない。第11、12章はまとめにあたるもので、認知神経科学がいかに美学に貢献できるかを述べ、また筆者の基本的立場も述べられている。

私はヒト以外の動物でも美に対する感受性はある、また美を創造することもできると考えている。その意味で、美こそがヒトをヒトたらしめるものだとか、アートはヒト固有のものだ、という考え方には与しない。しかし、美がヒトにおいて最も発達していることは論を待たない。同じことは道具の作成、コミュニケーション能力、知能に関してもいえることであって、連続性を推定できることはあっても、それらのヒトにおける発展がずば抜けていることはいうまでもない。美はそれ自体が美として価値をもつ前になんらかの機能があり、やがて、本来の機能から離れて自律的に美として価値もち快感を起こすものとなり、自律的な美の論理によってさらに洗練されていったと見るべきだろう。動物の美の研究は、美の快感が本来何に基づいていたのかを明らかにする。そして神経美学は経験科学として、さまざまな美の共通性と差異を明らかにするだろう。美学の先生からは「美は制度である」と指摘されたが、美が制度となったときに脳内には何らかの変化があったに違いなく、また素朴に美とを感じるものと、制度として獲得された美では脳内処理が違うはずである。最初に述べた美学者の意見とゼキの意見は神経科学的に

統合して理解できるはずだ。この本を読まれた若い方が、これらの謎に挑戦しようと思われることを祈っている。すべきことは山のように聳えている。怯まず進んで欲しい。